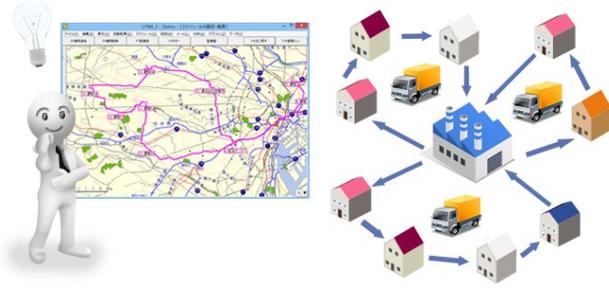




### ◆③自動配車システム

自動配車システムは、積地住所、卸地住所、到着時刻、荷物重量・容積、車両種別などから、AIロジックを使用して、どの荷物をどの車両で何時にどこで積込し、何時にどこで卸すのかを考慮して、自動で配車するシステムである。



### ◆④ナビゲーションシステム

ナビゲーションシステムは、最終確定した車両別運行情報のデータを連携して、車両別の出発時間、経路情報をタブレット(一部スマートフォン)上に表示する、法人向け有償サービス。



## 4. コスト・期間

費用項目	金額	導入段階	期間
I. 自動配車システム パッケージソフト及びデータ連携のためのカスタマイズ費用(一時金)及び保守料(年額)	パッケージソフトウェア 6,000,000円 保守料(年) 600,000円	システム検討 社内のシステム検討、荷主側とのデータ連携の可能性検討・交渉	2年
II. ナビゲーションシステム 法人向け有償サービス(月額費用)	管理者システム(4人) 40,000円 ドライバー用(25人) 62,500円	システム導入 システム打合せ、マスター整備、カスタマイズ(データ連携等)開発等、導入トレーニング	12ヶ月
III. 配車予約システム クラウド利用無料サービス	0円		
IV. タブレット 法人契約月額費用	タブレット(42台) 252,000円		
合計 初期費用	6,000,000円		
月額費用(保守サービス・通信料)	(142,000円/車両) 404,500円 (9,631円/車両)		

## 5. 導入効果

- ◆ 受注状況、配車状況がすべてわかり、問い合わせ対応もすぐにできる。
- ◆ 荷主からの依頼に対して、すばやく配車予約の回答ができるようになった。
- ◆ 荷主のシステムと連動もでき、ミスや漏れもなくなった。
- ◆ 運行状況までリアルタイムに把握可能になった。
- ◆ 事務の精度が向上し、荷主、納品先にも評価されるようになった。

## 6. 成功のポイント

- ◆ 将来のドライバー不足への対応を重要課題として取り組み、高齢ドライバーが多い中でも、じっくりと説得して、改革に取り組んできた。
- ◆ 荷主とのデータ連携を図り、車両、荷物、積地、卸地、時間のデータ化ができたこと。
- ◆ 小さな成功を重ねる積上型のアプローチで、少しずつ導入してきた。

## 7. DX推進マトリクス評価・解説

この運送会社は、第2象限「データ活用による業務最適化（デジタルイゼーション）」の高度な領域に進んでいると評価できます。特に、ベテラン配車マンの属人化解消、業務拡大への対応、そして荷主とのシステム連携という明確な課題に対し、複数のシステムを連携させ、データドリブな配車・運行管理を実現している点が際立っています。

【1】 業務効率	【2】 業務最適
【3】 基盤構築	【4】 競争優位

### 「守りのDX」の高度化と広範な実現

- 属人化の解消と効率化  
「ベテラン配車マンの育成困難」という課題に対し、自動配車システムを導入し、AIロジックで積地・卸地、時間、積載などを考慮した配車を自動化しています。これにより、属人性を低減させています。
- リアルタイムな情報把握  
配車予約、荷主側配車、自動配車、ナビゲーションの4つのシステム連携により、受注から運行までの全プロセスが可視化されました。管理者はリアルタイムに運行状況を把握でき、荷主からの問い合わせにも即座に回答可能になったことは、顧客対応品質の向上に大きく貢献しています。
- ミス・漏れの削減と事務精度の向上  
荷主システムとの連携により、受注・配車プロセスにおける手作業によるミスや漏れが大幅に減少し、事務作業の精度が向上。
- 「データ活用」の徹底  
荷主からの配車依頼、自動配車による計画、ナビゲーションシステムからの運行実績データが連携され、一貫したデータフローが構築されています。
- 投資対効果の明確化  
システム導入に約2年間をかけ、比較的高額な投資を行いつつも、得られた明確な効果（問い合わせ対応迅速化、ミス削減、事務精度向上）は、投資が適切であったことを示唆しています。

### 成功のポイント

- 「ドライバー不足への対応を重要課題とし、高齢ドライバーへの説得を含め改革に取り組んだ」という点は、DX推進における人材面での課題を丁寧に克服した姿勢を示しています。
- 「荷主とのデータ連携」は、サプライチェーン全体での効率化という視点でDXを進めた重要な要因です。
- 「小さな成功を重ねる積上型のアプローチ」は、大規模な改革を一気に行うのが難しい中小企業にとって、非常に有効な戦略です。

### 今後の取り組みへの提言

- データ分析の高度化と意思決定への活用  
現在把握している運行データに加え、車種別ごとの積載率・実車率、走行距離、時間帯別の効率、待機時間などを詳細に分析し、自動配車ロジックのさらなる改善や、車両の最適な配置・運用に繋げましょう。
- これらのデータを基に、コスト削減効果や生産性向上度合いを定量的に評価し、経営層がデータドリブな意思決定を行えるよう、定期的なレポート作成やダッシュボードの構築を検討しましょう。
- システム連携により、すでに運行状況は把握できていますが、ドライバーの拘束時間、休憩・休息時間、待機時間といったデータをさらに詳細に抽出し、改善基準告示への適合状況を自動でチェック・警告する機能の導入、またはカスタマイズを検討しましょう。
- 「仮設機材輸送のプロフェッショナルとして、顧客にどのような新しい価値を提供するのか」という「攻め」のDXビジョンを具体的に策定し、社員全体で共有しましょう。